

ネガティブライフイベントを経験した大学生の 二次元レジリエンス要因とアサーションとの関連について

伊庭 恵未・幸田 るみ子

キーワード：ネガティブライフイベント レジリエンス アサーション 大学生

抄録：本研究では、青年期という発達段階にある大学生に焦点を当て、日常的なネガティブライフイベントを経験した大学生の二次元レジリエンス要因とアサーションの関連について検討することを目的とした。

方法は首都圏の私立大学に在学する大学生 508 名を対象とし、質問紙による調査を行った。調査には「ライフイベント尺度」(平尾・山本, 2008), 「二次元レジリエンス要因尺度」(平野, 2010), 「青年用アサーション尺度」(玉瀬・越智・才能・石川, 2001) を用いた。

その結果、ライフイベント尺度は元の 1 因子構造とは異なり、「日常の多忙さ」($\alpha = .83$), 「特別な出来事」($\alpha = .74$) の 2 因子が抽出された。二次元レジリエンス要因尺度は元の 7 因子構造とは異なり、「社交性」($\alpha = .85$), 「自他の理解」($\alpha = .70$), 「忍耐力」($\alpha = .71$), 「楽観性」($\alpha = .67$) の 4 因子が抽出された。また、青年用アサーション尺度は、いくつかの項目が削除されたが元の尺度と同じ「関係形成」($\alpha = .74$), 「説得交渉」($\alpha = .46$) の 2 因子構造となった。レジリエンスとアサーションの関連については、二次元レジリエンス要因尺度のすべての因子と青年用アサーション尺度の「関係形成」との間に有意な正の相関がみられた(社交性因子 $r = .31, p < .001$, 自他の理解因子 $r = .38, p < .001$, 忍耐力因子 $r = .22, p < .001$, 楽観性因子 $r = .31 < .001$, レジリエンス合計 $r = .45, p < .001$)。

さらに、重回帰分析の結果、モデルの適合度はやや低いですが、ネガティブライフイベントを説明する要因として二次元レジリエンス要因尺度の「社交性」因子 ($t = 3.90, p < .001$) と性別 ($t = -2.84, p < .01$) に有意な関連が認められた。

1. はじめに

人は、日常生活の中で様々なストレスを経験している。悩みやストレスがある中で適応的に過ごしていくために重要な、精神的健康に関連のある概念のひとつとして注目されているものにレジリエンスがある。未だ明確な定義づけはなされていない概念であり、理論的な検討が充分になされているとはいえないが、レジリエンスを引き出し、強化することで困難からの回復を促すことは、様々な年代、立場、状況の人に対して応用可能であり、大変重要な概念であると筆者は考える。よって、本研究ではレジリエンスについて取り上げることとした。

レジリエンスを心理特性と捉え、「資質的要因」と「獲得的要因」の二つの要因に分けて捉

えるために作成されたものとして、平野 (2010) の二次元レジリエンス要因尺度 (Bidimensional Resilience Scale: 以下 BRS) が挙げられる。BRS は、Cloninger の気質 - 性格理論を反映した尺度である Temperament Characteristic Inventory (以下 TCI) (Cloninger, 1993) に基づいて作られ、持って生まれた気質と関連の強い「資質的レジリエンス要因」(楽観性, 統御力, 社交性, 行動力の 4 因子) と発達的に身につけやすい「獲得的レジリエンス要因」(問題解決志向, 自己理解, 他者心理の理解の 3 因子) の 2 要因からなるものである。この BRS を用いて平野 (2012) は、レジリエンスがライフイベントを経験してどのように変化していくかを検討している。その結果、各レジリエンス要因における下位尺度とポジティブライフイベントには、いくつかの関連が見られたが、ネガティブライフイベントとは関連が見られず、レジリエンス要因は、ネガティブライフイベントの認知とは資質的・獲得的要因共に無関係であるということが示唆された。しかしながら、この BRS 作成の基礎となった TCI を使用した高橋 (2005) では、先述した平野 (2012) で示唆されたものとは異なり、Cloninger モデルの気質・性格次元共にネガティブライフイベントの影響を受けていることが示唆されていた。この二つの研究結果の差異について、筆者は対象者へのネガティブライフイベントについての質問の方法、および個人のネガティブライフイベントの捉え方についての検討が課題であったと考え、この点を踏まえレジリエンス要因とネガティブライフイベントとの関連について再度検討を行う必要があると考えた。

ライフイベントとは、生活上の出来事と訳されることもあればライフイベントとそのまま用いられることもあり、ストレスの一つとして考えられている。ライフイベントは、最近では、大きく分けて二つに分類されている。一つ目は、喪失体験や“入学”“結婚”という慶事など、人生における衝撃的な単発の出来事であり、二つ目は、睡眠や食事を犠牲にして、休養や余暇を取らないなどの心身両面の適応努力のことであり、後者は衝撃性については低い、反復的・持続的であり、慢性的な心身反応を除々に生じさせると言われている。よって、本研究ではライフイベントを日常的に誰もが経験する適応努力とし、その経験はネガティブな出来事であることから、ネガティブライフイベントと呼ぶこととする。

本研究ではもう一つ概念としてアサーションを取り上げる。今日のアサーションの定義は、三田村 (2011) で述べられているような、人が相手に対し、自己主張や説得、意見の表明など「他者に対し働きかけること全般」をアサーションと呼ぶものもあるが、濱口 (1994) のように「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を敵対的でない仕方表現する行動」や沢崎・平木 (2005) のように「自分も相手も大切にしたい自己表現」であり「自分の考え、欲求、気持ちなどを率直に、正直に、その場にあった適切な方法で述べること」など、自分と相手との関係性を考慮した攻撃的な行動を除外する方向のものとして捉えられることが多くなっている。これらを受けて、他者に対して「配慮」したり「遠慮」したりして、他者との対立を避ける (堀川ら, 2006) という傾向を持つ現代社会の人間関係において、自己と他者の関係性を考慮することを重要視すべきであると筆者は考える。従って、アサーションとは、自分の考えや感情を主張すべき時に、相手の立場を尊重しつつ、その場にふさわしい方法で、

率直にそれを表現することと定義する。また、アサーションを構成するものについての考え方も研究者によってさまざまであるが、本研究では、アサーションの定義を上述のようにしたため、より攻撃性に関する項目を含まない考え方をとるものとして、玉瀬ら(2001)の青年用アサーション尺度を用いることとした。この尺度は、関係形成と説得交渉の2因子構造であり、関係形成は、人との望ましい関係を形成することにかかわるもので、説得交渉は何らかの葛藤的な場面において相手に対して説得や交渉を行うときにかかわるものとされている。

レジリエンスとアサーションの関連についてであるが、それぞれの概念の下位尺度についてはいくつかの先行研究が挙げられる。例えば、園田ら(2000)が「自分を理解していれば、相手に何を言いたいのがはっきり」するため、アサーション行動をとりやすくなると自己理解とアサーションの関連性について述べている。また玉瀬ら(2003)も、アサーション行動の発現の規定要因として“他者との関連性”を挙げて、他者を理解しようとし関係性を保とうとすることとアサーションの関連性について述べている。しかし、現在のところ、レジリエンスとアサーションという双方の概念自体の関連について検討した先行研究はないため、二次元レジリエンス要因とアサーションの関連を明らかにすることによって、それぞれの概念についてより理解が深まると考えられる。

また、本研究では、特に青年期という発達段階にある大学生に焦点を当てる。青年期は心理社会的発達において、大きな変化が生じる時期(小塩ら, 2002)であり、高比良(1998)の中でも、大学生などの青年は、日常の中で多くの困難や苦痛をもたらすような出来事を経験する可能性があるという指摘されているように、友人関係、学業、または将来の進路の選択など様々なストレスとなりうるライフイベントを経験することとなるのである。また、小塩ら(2002)でも、大学生を対象にレジリエンスが高い者の特徴として、社会的スキルが発達していることや、ストレスが少ないこと、成長感が高いこと、自尊感情が高いことなどを報告している。

大学生のアサーション行動に関して、細田ら(2009)では、他者との関係性は、自己肯定感と他者肯定感を高める要因であることが明らかにされている。これらのことから、ネガティブライフイベントを経験した青年期の大学生のレジリエンスやアサーションの特徴やその関連性について明らかにすることには意義があると考えたため、本研究では、青年期の大学生を対象とすることとした。

2. 目的

本研究は、日常的なネガティブライフイベントを経験した大学生の二次元レジリエンス要因とアサーションの関連について検討することを目的とする。本研究の仮説は「日常的なネガティブライフイベントを経験した大学生の二次元レジリエンス要因、特に獲得的レジリエンス要因とアサーションには関連がある」と考える。

3. 方法

1) 調査対象・期間

(1) 対象

本研究では、首都圏の私立大学 A の学生 508 人に質問紙を配布し調査を行った。

(2) 期間

調査期間は 2013 年 9 月～2013 年 12 月であった。

2) 手続き

依頼をして承諾を得られた教員の講義の受講学生に、講義終了後、自己記入式の質問紙を一部ずつ封筒に入れて配布し、質問紙調査に関する説明を 5 分ほど行った。質問には無記名で回答してもらい、翌週の講義時間の後に回収した。

3) 使用尺度

(1) ライフイベント尺度

「ライフイベント尺度」は平尾ら（2008）によって作成された尺度であり、10 項目からなる 1 因子構造である。そのライフイベントをどのように捉えているのか、その程度について 7 件法で回答を求め、合計得点が高得点になるほど、ネガティブライフイベントに対してポジティブな捉え方をしていることを意味する。この尺度は、日常生活で誰もが経験しうるライフイベント項目が用いられており、かつそのライフイベントに対する個人の負担の程度や認知の違いについて測定することができることから採用した。

(2) 二次元レジリエンス要因尺度

「二次元レジリエンス要因尺度」は平野（2010）によって作成された尺度であり、「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」の二つの下位尺度がある。「資質的レジリエンス要因」は「楽観性」「統御力」「社交性」「行動力」の 4 つの因子から、「獲得的レジリエンス要因」は「問題解決志向」「自己理解」「他者心理の理解」の 3 つの因子から成り立つ。それぞれ 3 項目ずつの計 21 項目からなり、5 件法で回答を求める。この尺度は、レジリエンスを心理特性と捉えていること、また「資質的要因」と「獲得的要因」の二つの要因に分けて捉えることができることから採用した。

(3) 青年用アサーション尺度

「青年用アサーション尺度」は、玉瀬ら（2001）によって作成された尺度であり、「関係形成因子」と「説得交渉因子」の二つの下位尺度がある。「関係形成因子」は、「好きな人には率直に愛情や好意を示す」、「他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする」などの 8 項目であり、「説得交渉因子」は、「買った商品に欠陥があったら交換してもらおう」、「友達の都合を一方的に押し付けられた時は断る」などの 8 項目である。それぞれ 5 件法で回答を求める。この尺度は、アサーションを自分の考えや感情を主張すべき時に、相手の立場を尊重しつつ、その場にふさわしい方法で、率直にそれを表現することと捉えていること、また、より攻撃性に関する項目を含まない考え方をとるものであるなどの理由から採用した。

4) 倫理的配慮

個人が特定されないよう、無記名での質問紙調査を行った。また記入済みの質問紙は、研究担当者の責任において厳重に保管・管理をし、研究終了後には破棄をした。研究の目的と方法に加え、調査への協力は任意であり、協力しない場合も対象者に不利益はないこと、成績とは一切関係がないことを、質問紙調査の前に口頭で十分に説明をした。なお、桜美林大学の倫理委員会へ審査を申請し、研究の許可を受け実施した（受付番号 13017）。

4. 結果

1) 調査結果

対象者数は、4 学年 508 人であった。無回答、欠損回答を除き、4 学年 311 人（男性 148 人、女性 163 人：有効回答率：61.2%）を有効回答者数とし、分析の対象とした。分析対象者の学年・性別の度数を Table1 に示す。

Table1 分析対象者の性別・学年

	性別		合計
	男性	女性	
1 年生	80	90	170
2 年生	37	35	72
3 年生	20	25	45
4 年生	11	13	24
合計	148	163	311

2) ライフイベント尺度

(1) 尺度の分析

まず、「ライフイベント尺度」について、今回の対象者の結果に基づいて、再度因子分析を行い、因子構造の検討を行った。主因子法 Promax 回転による因子分析を行い、2 因子構造を採用した。全分散を説明する累積寄与率は 56.6% であった。

第 1 因子は、日常生活の中で自由に使える時間の減少といった内容の 6 項目が高い負荷量を示していた。そこで本研究では新たに「日常の多忙さ」因子と命名した。第 1 因子の α 係数を算出したところ .832 となり、高い信頼性がみられた。第 2 因子は、いつも起きるわけではない、普段とは違うネガティブな出来事といった内容の 4 項目が高い負荷量を示していた。そこで本研究では因子名を新たに「特別な出来事」因子と命名した。第 2 因子の α 係数を算出したところ .744 となり、一定の信頼性がみられた。

(2) 性別と学年によるライフイベントの差の検討

ライフイベントに与える性別の影響を分析するために、ライフイベント尺度の下位尺度とその合計得点について t 検定を行った。結果を Table2 に示す。その結果、日常の多忙さ因子 ($t=2.14$, $df=309$, $p<.05$), 特別な出来事因子 ($t=2.78$, $df=309$, $p<.01$), ライフイベント合計 ($t=2.99$,

$df=309, p<.01$) において女性よりも男性の方が有意に高い得点を示した。

次に、学年の影響を分析するために、分散分析を行った。その結果、日常の多忙さ因子 ($F(3,307) = .099, n.s.$), 特別な出来事因子 ($F(3,307) = 1.109, n.s.$), ライフイベント合計 ($F(3,307) = 0.496, n.s.$) において学年の得点差は有意ではなかった。

Table2 ライフイベント尺度の男女別の平均値と標準偏差および t 検定の結果

	男性	女性	t 値	p
日常の多忙さ	19.36 (4.01)	18.46 (4.79)	2.14 *	.033
特別な出来事	12.73 (4.08)	11.46 (3.95)	2.78 **	.006
ライフイベント合計	33.37 (8.02)	30.87 (6.78)	2.99 **	.003

上段：平均値 下段：標準偏差

** $p < .01$, * $p < .05$

3) 二次元レジリエンス要因尺度

(1) 尺度の分析

まず、「二次元レジリエンス要因尺度」について、今回の対象者の結果に基づいて、再度因子分析を行い、因子構造の検討を行った。主因子法 Promax 回転による因子分析を行い、4 因子構造を採用した。回転前の 4 因子で 14 項目の全分散を説明する累積寄与率は 60.6% であった。

本研究で得られた 4 因子構造は、平野 (2010) による 7 因子構造とは異なる結果となった。

しかし、得られた 4 因子のうち 2 因子については、その項目数は減ったものの、それぞれの因子を構成する項目の内容は先行研究と変わらないため、そのままの因子名を用いることとした。よって残りの 2 因子に対して、筆者が新しく因子名を命名した。第 1 因子は、人との関係性においての積極的な働きかけといった内容の 3 項目が高い負荷量を示していた。平野 (2010) の「社交性」因子に含まれる項目と同じものであったため、先行研究と同じ社交性因子と命名した。第 1 因子の α 係数を算出したところ .854 となり、高い信頼性がみられた。第 2 因子は、自分自身そして他者に対して関心を持ち、理解をしようとするといった内容の 5 項目が高い負荷量を示していた。そこで本研究では因子名を新たに「自他の理解」因子と命名した。第 2 因子の α 係数を算出したところ .704 となり、一定の信頼性がみられた。第 3 因子は、何かに取り組み時に最後まであきらめずにやり通すといった内容の 4 項目が高い負荷量を示していた。そこで本研究では、因子名を新たに「忍耐力」因子と命名した。第 3 因子の α 係数を算出したところ .710 となり、一定の信頼性がみられた。第 4 因子は、何ごととも最終的には上手くいくであろうと予測をするといった内容の 2 項目が高い負荷量を示していた。平野 (2010) の「楽観性」因子に含まれる項目と同じものであったため、先行研究と同じ楽観性因子と命名した。第 4 因子の α 係数を算出したところ .670 となり、信頼性はやや低かった。

平野 (2010) では、これらの因子が「資質的要因」と「獲得的要因」に分かれていることが

特徴として挙げられるが、今回、本研究で再度行った因子分析では、第1因子、第3因子第4因子が資質的要因、第2因子が獲得的要因という結果になった。

(2) 性別と学年による二次元レジリエンス要因の差の検討

二次元レジリエンス要因に与える性別の影響を分析するために、二次元レジリエンス尺度の下位尺度とその合計得点についてt検定を行った。その結果、社交性因子 ($t=0.96, df=309, n.s.$) と、自他の理解因子 ($t=-0.99, df=309, n.s.$) と忍耐力因子 ($t=0.49, df=309, n.s.$) と、楽観性因子 ($t=0.45, df=309, n.s.$) とレジリエンス合計 ($t=0.13, df=309, n.s.$) について男女の得点差は有意ではなかった。

次に、学年の影響を分析するために、分散分析を行った。結果をTable3に示す。その結果、社交性因子 ($F(3,307)=4.338, p<.01$)、レジリエンス合計 ($F(3,307)=4.582, p<.01$) について、学年の得点に有意な差があった。自他の理解因子 ($F(3,307)=2.599, n.s.$)、忍耐力因子 ($F(3,307)=1.458, n.s.$)、楽観性因子 ($F(3,307)=1.823, n.s.$) について、学年の得点差は有意ではなかった。

Table3 二次元レジリエンス尺度の学年別の平均値とSDおよび分散分析の結果

	1年生	2年生	3年生	4年生	F値	p
社交性	9.41 (2.45)	8.26 (2.48)	9.22 (3.12)	9.17 (2.84)	4.338 **	.005
自他の理解	18.3 (3.19)	17.31 (3.10)	17.64 (3.65)	19.04 (3.07)	2.599	.052
忍耐力	14.14 (2.90)	13.50 (2.88)	13.71 (3.46)	14.75 (2.47)	1.458	.226
楽観性	7.35 (1.61)	6.85 (1.77)	7.42 (1.75)	7.04 (1.68)	1.823	.143
レジリエンス合計	49.39 (7.63)	45.76 (6.90)	47.84 (8.43)	50.38 (6.37)	4.582 **	.004

上段：平均値 下段：標準偏差

** $p < .01$

次に、主効果が有意であった社交性因子とレジリエンス合計の1年生・2年生・3年生・4年生のどの群間に差があるかについて検討するために多重比較 (Tukey HSD) を行った。その結果を Fig1, Fig2 に示す。

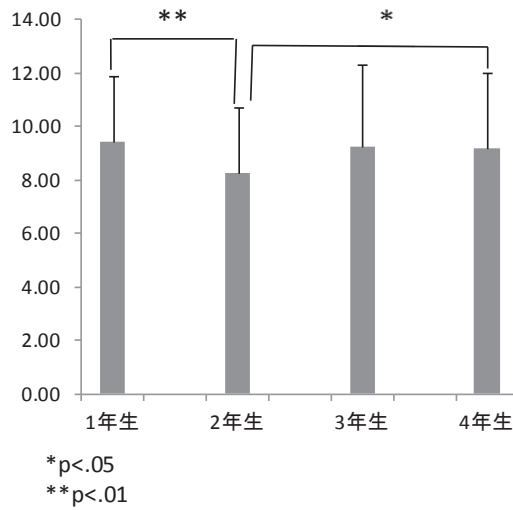


Fig1 社交性因子の学年間における多重比較 (Tukey HSD) の結果

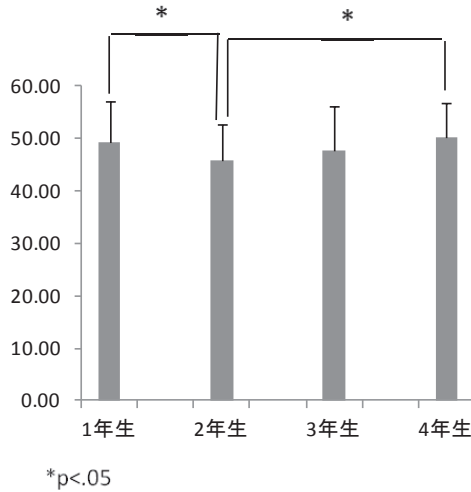


Fig2 レジリエンス合計の学年間における多重比較 (Tukey HSD) の結果

社交性因子は、1年生と2年生 ($p=.010$), 2年生と4年生 ($p=.020$) の間に有意な差が認められた。またレジリエンス合計でも、1年生と2年生 ($p=.039$), 2年生と4年生 ($p=.024$) の間に有意な差が認められた。

4) 青年用アサーション尺度

(1) 尺度の分析

まず、「青年用アサーション尺度」について、今回の対象者の結果に基づいて、再度因子分析を行い、因子構造の検討を行った。主因子法 Promax 回転による因子分析を行い、2 因子構造を採用した。回転前の 2 因子で 10 項目の全分散を説明する累積寄与率は 43.5% であった。

この得られた 2 因子構造はそれぞれの因子内の項目はいくつか削除されたが、因子を構成する内容は、玉瀬ら (2001) の研究と同様であるため、そのままの因子名を用いることとした。第 1 因子は、「関係形成」因子であり、自分が聞きたいことや伝えたいことがある場合に相手に積極的に発信していくといった内容の 7 項目が高い負荷量を示していた。第 1 因子の α 係数を算出したところ .741 となり、一定の信頼性がみられた。第 2 因子は、「説得交渉」因子であり、自分に害があったり、不利益なことが起きたりした場合、その内容についての説得や交渉を積極的に行うといった内容の 3 項目が高い負荷量を示していた。第 2 因子の α 係数を算出したところ .465 となり、信頼性は低かった。

(2) 性差と学年による青年用アサーションの差の検討

青年用アサーションに与える性別の影響を分析するために、青年用アサーション尺度の下位尺度とその合計得点について t 検定を行った。結果を Table4 に示す。その結果、説得交渉因子 ($t=2.35, df=309, p<.05$) について女性よりも男性の方が有意に高い得点を示した。関係形成因子 ($t=-0.09, df=309, n.s.$) と、アサーション合計 ($t=0.91, df=309, n.s.$) について男女の得点差は有意ではなかった。

次に、学年の影響を分析するために、分散分析を行った。その結果、関係形成因子 ($F(3,307)=2.019, n.s.$)、説得交渉因子 ($F(3,307)=0.842, n.s.$)、アサーション合計 ($F(3,307)=0.881, n.s.$) について、学年の得点差は有意ではなかった。

Table4 青年用アサーション尺度の男女別の平均値と SD および t 検定の結果

	男性	女性	t 値	p
関係形成	24.61 (4.00)	24.66 (4.24)	-0.89	.929
説得交渉	8.57 (2.14)	8.04 (1.85)	2.35	.019 *
アサーション合計	33.19 (4.83)	32.70 (4.70)	0.91	.366

上段：平均値 下段：標準偏差

* $p < .05$

5) 尺度間の関連

各尺度間の相関を Table5 に示す。「日常の多忙さ因子」と「特別な出来事因子」・「社交性因子」の間には有意な正の相関が示された。また、「社交性因子」と「自他の理解因子」・「忍耐力因子」・「楽観性因子」・「関係形成因子」・「ライフイベント合計」・「アサーション合計」の

Table5 各尺度の相関と平均、標準偏差

	ライフイベント尺度			二次元レジリエンス要因尺度			青年用 アサーション尺度			平均	SD		
	日常の多忙さ	特別な出来事	社交性	自己の理解	忍耐力	楽観性	関係形成	説得交渉	ライフイベント 合計			レジリエンス 合計	アサー ション 合計
日常の多忙さ	-	.28 ***	.21 ***	.07	.07	.09	-.01	-.03	.88 ***	.15 **	-.02	19.26	5.66
特別な出来事	-	-	.13 *	-.02	.09	.10	-.04	.08	.68 ***	.08	.00	12.80	3.57
社交性	-	-	-	.38 ***	.41 ***	.34 ***	.31 ***	.18 **	.22 ***	.72 ***	.34 ***	9.17	2.63
自己の理解	-	-	-	-	.34 ***	.29 ***	.38 ***	-.02	.04 *	.73 ***	.32 ***	18.03	3.26
忍耐力	-	-	-	-	-	.33 ***	.22 ***	.01	.09	.73 ***	.20 **	13.97	2.96
楽観性	-	-	-	-	-	-	.31 ***	.10	.11	.59 ***	.31 ***	7.22	1.68
関係形成	-	-	-	-	-	-	-	.10	-.03	.45 ***	.91 ***	24.64	4.12
説得交渉	-	-	-	-	-	-	-	-	.02	.08	.51 ***	8.30	2.00
ライフイベント合計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.15 **	-.02	32.06	7.49
レジリエンス合計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.43 ***	48.40	7.63
アサーション合計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32.93	4.76

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

間に有意な正の相関が示された。「自他の理解因子」と「忍耐力因子」・「楽観性因子」・「関係形成因子」・「アサーション合計」にも有意な正の相関が示された。「忍耐力因子」と「楽観性因子」・「関係形成因子」にも有意な正の相関が示された。「楽観性因子」と「関係形成因子」・「アサーション合計」の間に有意な正の相関が示された。「関係形成因子」と「レジリエンス合計」との間にも有意な正の相関があり、「レジリエンス合計」と「アサーション合計」の間にも有意な正の相関が示された。

6) ネガティブライフイベントを従属変数とした重回帰分析

従属変数をネガティブライフイベントを表す「ライフイベント尺度」のライフイベント尺度の合計とした、探索的重回帰分析を行った。独立変数は、「二次元レジリエンス要因尺度」の4因子、「青年用アサーション尺度」の2因子、学年、性別とした。重回帰分析の結果を Table6 に示す。

まず多重共線性の診断を行うために、VIF (Variance Inflation Factor) の算出を行った。その結果、各因子の VIF はすべて 1.9 未満であること、また、独立変数間に強い相関が見られないことなどから多重共線性の存在は影響しないと診断された。この重回帰分析の結果から、社交性因子との間には正の関連性があり、性別との間には負の関連性がある可能性があることが示唆された。しかし、修正済み決定係数は 0.068 となり、モデルの適合度としては低い結果となった。

Table6 ライフイベント尺度の合計を従属変数とした重回帰分析

変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	t 値	有意確率
社交性因子	.610	.215	3.909 ***	.000
性別	-2.331	-.156	-2.836 **	.005

*** $p < .001$, ** $p < .01$

5. 考察

1) ライフイベント尺度の分析結果の考察

本研究で再度因子分析を行ったところ、2 因子構造が妥当であると考えられる結果となった。項目の内容を見てみると、第 1 因子の日常の多忙さ因子の「休みが減った」「一日でやることが増えた」「睡眠時間が減った」という項目に比べ、第 2 因子の特別な出来事因子の「家族の誰かが病気や怪我をした」や「試験・レポートで悪い成績をとった」といった項目は、過去 1 年間という限定した期間の中では体験していないという人がいるのは自然なことであり、二つの因子には、体験率の違いがあったことが考えられる。また、この二つの因子の体験率の違いに着目すると、第二因子の特別な出来事因子は、どちらかと言えば、ライフイベントの定義の中でも衝撃的で単発的な出来事に近い内容であると言える。

また、第 1 因子の項目は、どんなことが起きたから「休みが減った」り「忙しくなった」のか、「一日でやることが増えた」という項目の「やること」とは何なのかといったように、起きた出来事についての具体性が欠けた文章の構成になっており、回答者によっては、その文章をポ

ジティブな出来事として認識したということが、今回の因子分析の結果としてあらわれた可能性も考えられる。今後は、ライフイベントには日常的な出来事と特別な出来事という二つの定義があることを十分に踏まえること、また、質問内容についてより具体的な文章構成にすることなどに注意し、尺度を再度検討していく必要があると考えられる。

次に性差についてだが、今回の結果からは、男性の方が女性よりも、ライフイベント得点が有意に高く、起こったネガティブライフイベントに対してよりポジティブに捉える傾向があると解釈することができた。ライフイベントについて性差の検討をしている先行研究もみられるが、それらは、男女それぞれの体験率の差についての検討を示しているものであり、起きた出来事を男女がそれぞれどのように捉えるのかという観点から報告されたものはなかったため、本研究での新しい知見であると考えられる。

2) 二次元レジリエンス要因尺度の分析結果の考察

本研究の二次元レジリエンス要因尺度の因子分析の結果は、元の尺度である平野（2010）で使用された尺度の因子分析の結果とは異なるものとなった。平野（2010）では、7つの因子に分かれたものの、「統御力」「問題解決思考」「自己理解」という3因子に関しては α 係数が低いため、7因子を下位尺度として取り出して考えるよりも、資質的レジリエンス要因、獲得的レジリエンス要因という2因子としての使用が望ましいと述べている。本研究では、平野の「行動力」に関する3項目と「統御力」に関する1項目をまとめて忍耐力因子としたところ、 α 係数も高くなった。この「行動力」と「統御力」については、平野（2010）でも、2因子の因子間相関は高い結果となっており、両者には共通性があったと言える。また同じく平野（2010）で α 係数が低かった「問題解決思考」に関する項目は、本研究では、すべて因子負荷量が基準に満たなかったため、削除された。よって、「問題解決思考」が、レジリエンスという概念の中に含まれるべきものであるかについては今後検討していくべきであると考えられる。そして、平野（2010）の「自己理解」に関する2項目と「他者心理の理解」の3項目をまとめて、自己理解因子という因子としたところ、 α 係数も高くなった。これについても、両者は相互に関連し合っていることが考えられるためであると言える。学年差については、学年ごとの度数の差によりグループごとの等質性が保たれていなかったという本研究の限界があったが、社交性因子については、大学1年生という学年は、大学に入学して間もないため、環境の変化があり、その中で新しい交友関係を築いていく機会が他の学年よりも多いことが考えられたため、他人との関係性を築いていく上で社交性因子に含まれる項目が高い得点になった可能性が推測される。

3) 青年用アサーション尺度の分析結果の考察

説得交渉因子に含まれる項目が大幅に削除され、 α 係数や累積寄与率が低い結果となったが、これについて玉瀬ら（2001）では、“関係形成が十分できるようになった後に説得交渉ができる能力が習得されるのではないかと考えられており、研究対象とした大学生は、関係形成を習得している段階であり、説得交渉因子に関する項目は体験する機会が少なかったのではないかと考えられる。また、尺度が作成されて10年以上経過した現在、インターネット

トや携帯電話の普及により、調査対象となった大学生は、相手との間接的なやり取りをする機会が増え、他者に対してのアサーション行動を取る機会は減少していることが考えられる。説得交渉因子において、性別による有意な差についてはいくつかの先行研究でも述べられている結果と一致するものであった。

4) 尺度間の関連についての考察

二次元レジリエンス尺度のすべての因子と青年用アサーション尺度の関係形成因子に正の相関がみられ、本研究の仮説の一部が支持される形となった。本研究の仮説との違いは、獲得的レジリエンス要因だけでなく、資質的レジリエンス要因である「社交性」因子、「忍耐力」因子、「楽観性」因子も、青年用アサーション尺度の関係形成因子と関連があったということである。また、青年用アサーション尺度の説得交渉因子に関しては、二次元レジリエンス要因のどの因子とも関連が無いという結果も、本研究で立てた仮説とは異なるものであった。これについては、説得交渉因子の α 係数が非常に低いものであったことと関係していると考えられる。

5) ネガティブライフイベントを従属変数とした重回帰分析結果の考察

モデルの適合度が低かったため、ライフイベントの捉え方を説明する要因については、再度検討していく必要があるといえる。その部分を考慮したうえで、ネガティブライフイベントと社交性因子に正の関連性があるということは、社交性を有していると、ネガティブなライフイベントを経験してもネガティブな出来事であると捉えない可能性が示唆される。先行研究ではネガティブイベントの体験率とレジリエンスの関連について検討されたものが主流であり、ネガティブライフイベントの捉え方とレジリエンスの関連については本研究による新しい知見であるといえる。

ネガティブライフイベントの捉え方を説明する要因として、アサーションに関する項目はあがらなかったことについては、「青年用アサーション尺度」は、主に、対人場面についての出来事が項目の内容となっている。しかし、「ライフイベント尺度」の項目の内容は、対人場面での出来事だけではなく、自分自身の生活の中で起きたことについての項目が多く挙げられている。今後、ライフイベント尺度の選定を検討していく必要がある。

6. 仮説検証のまとめ

本研究の仮説は「日常的なネガティブライフイベントを経験した大学生の二次元レジリエンス要因、特に獲得的レジリエンス要因とアサーションには関連がある」と設定している。今回の結果では、二次元レジリエンス要因尺度のすべての因子と青年用アサーション尺度の関係形成因子に有意な正の相関がみられた。よって、レジリエンスを高めていくための臨床心理学的介入としてアサーションの中でも、特に人と望ましい関係を形成することに関わる部分が重要になってくることが示唆された。本研究の仮説との違いとして、二次元レジリエンス要因の資質的レジリエンス要因も青年用アサーション尺度の関係形成因子と関連があったことが挙げられる。そのため、仮説は一部が支持される形となった。このことから、関係形成因子が平野

(2010) の二次元レジリエンス要因の中の獲得的レジリエンス要因だけでなく、資質的レジリエンス要因とも関連があることが示唆された。

また、モデルの適合度が低い結果となったことは考慮しなければならないが、重回帰分析の結果により、ネガティブライフイベントを経験したとしても、その中で適応していくためには、二次元レジリエンス要因の中の社交性因子が重要になってくる可能性があることが示唆された。

7. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、調査対象者が少ないことや調査した大学が1校に限られていたことが挙げられる。これは、調査を実施した学校の特色を表しているという可能性も考えられる。

今後の課題としては、それぞれの尺度の再検討、重回帰分析のモデルの適合度を高めること、本研究では言及することができていない、それぞれの概念の因果関係なども検討していく必要がある。また、ライフイベントについて、日常的な適応努力という捉え方だけでなく、衝撃的で単発の出来事と捉えた場合におけるレジリエンスとの関連性も重要であると考えられる。

さらに今後は、レジリエンスを高めるための具体的な臨床心理学的介入として、「関係形成」という部分にどのようにアプローチしていくことができるのかということを探求していくことが望まれる。

付記

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた先生方、学生の皆様に、心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

- Cloninger, C. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- 濱口佳和 (1994). 児童用主張性尺度の構成. *教育心理学研究*, 42, 463-470.
- 平尾渉・山本眞利子 (2008). 大学生におけるライフイベントに対する認知の違いと精神的健康・性格特性に関する研究. *久留米大学心理学研究*, 7, 95-102.
- 平野真理 (2012). 二次元レジリエンス要因の安定性およびライフイベントとの関係. *パーソナリティ研究*, 21 (1), 94-97.
- 平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み - 二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成. *パーソナリティ研究*, 19 (2), 94-106.
- 細田絢・田蔦誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究. *教育心理学研究*, 57 (3), 309-323.
- 堀川徳子・柴山謙二 (2006). 現代の大学生に対するアサーション・トレーニングの効果について. *熊本大学教育学部紀要. 人文科学*, 55, 73-83.
- 三田村仰 (2011). しなやかか芯のある自己表現: 円滑な対人関係のための機能的アサーション. *心理臨床科学*, 1 (1), 21-23.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理特性—精神的回復力尺度の作成. *カウンセリング研究*, 35 (1), 57-65.

- 沢崎達夫・平木典子 (2005) . アサーション・トレーニングの考え方と歴史 (アサーション・トレーニング—その現代的意味) 現代のエスプリ, 450, 30-36.
- 園田雅代・中釜洋子 (2000) . 子どものためのアサーショングループワーク 日本・精神技術研究所.
- 高橋雄介・山形伸二・袴田優子・木島伸彦 (2005) . Cloninger の気質・性格次元に対するネガティブライフイベントの影響 パーソナリティ研究, 13 (2), 267-268.
- 高比良美詠子 (1998) . 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14 (1), 12-24.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001) . 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, 50 (1) , 221-232.
- 玉瀬耕治・馬場弘美 (2003) . アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究 教育実践総合センター研究紀要, 12, 43-50.